

## 「広村堤防」

## 和歌山県広川町

和歌山県は、海岸線がリアス式海岸であり、近海は浅海で南海トラフが走っていることから、古くから地震や津波の被害を多数受けてきている。宝永4年(1707)の地震津波と安政元年(1854)の南海道沖地震津波(安政の大津波)では、壊滅的な打撃を受けた。

地元の豪族の出身で、今日でも醤油メーカーとして知られるヤマサ醤油の7代目である濱口梧陵は、大地震の後に津波が襲ってくることを予期し、積んであった稲むらに火をつけて村民を避難させた。津波後、梧

陵が私欲を顧みず、私財を投じて堤防の築造や復興作業などを行ったことに感動した小泉八雲は、短編集の中で彼を「A Living God」として紹介している。この話をモデルにした「稲むらの火」という物語が、昭和12年(1937)から昭和21年(1946)にかけて、尋常小学校第五学年用国語読本に教材として用いられていた。

現在、安政の大津波が発生した旧暦11月5日(現在では、11月3日)に、全国でも珍しい「津浪祭」が行われている。参加者が広村堤防に土を盛り、郷土の安全と濱口梧陵の偉業を偲んでいる。



「広村を襲う安政南海地震津波の実況図」(養源寺蔵)

### みどころ



- 稲むらの火の館：安政の大地震津波時、その命の火で多くの村人を救った濱口梧陵は、現在に通じる津波防災の象徴として広く語り継がれている。その梧陵の偉業と精神、教訓を学び受け継いでゆくため、平成19年4月、広村堤防より徒歩2～3分の所に、濱口梧陵記念館と津波防災教育センターからなる「稲むらの火の館」が開館。是非来館され、来るべき時に備え、より多くの知識を身に付けてください。☎ 0737-64-1760